令和６年度全国学力・学習状況調査の結果概要

～千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

令和６年度全国学力・学習状況調査の結果概要

１　調査の概要

（１）調査の目的

○義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

○学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

○以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

（２）調査の対象学年

○小学校、義務教育学校前期課程、特別支援学校小学部の第６学年の児童

○中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校前期課程、特別支援学校中学部の第３学年の生徒

（３）調査の内容

○教科に関する調査〔国語、算数・数学〕

次の①と②を一体的に問う調査問題（記述式の問題を一定割合で導入）

① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等

② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等

○質問調査

① 児童生徒に対する調査（学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査）
児童生徒の活用する ICT 端末を用いたオンラインによる回答方式

② 学校に対する調査（指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査）　オンラインによる回答方式

（４）調査の方式

悉皆調査

（５）調査の実施日

令和６年 ４月１８日（木）

（６）本市における調査実施学校数及び児童生徒数

小学校１７校　７９０名　中学校 ８校　７６２名　※北進小中学校を除く市内小中学校

＊学校質問調査の結果について

質問調査では、調査項目が変更となる場合も多いことから、次の４観点に沿って質問項目を抽出し、千歳市の状況を把握することにした。

① 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言の取組状況や課題を把握する。

② 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」の効果や改善に向けた課題を把握する。

③ 千歳市教育委員会が重要課題として位置付けている「小中連携・一貫教育」の取組の状況や取組の充実に向けた課題を把握する。

④ 児童生徒と学校の意識の違いを把握する。

2　教科に関する調査結果

（北海道教育員会の分類方法による９段階）

相当高い	･･･	７ポイント以上	ほぼ同様（下位）	･･･	－１ポイント以下－３ポイント未満
高い	･･･	５ポイント以上７ポイント未満	やや低い	･･･	－３ポイント以下－５ポイント未満
やや高い	･･･	３ポイント以上５ポイント未満	低い	･･･	－５ポイント以下－７ポイント未満
ほぼ同様（上位）	･･･	１ポイント以上３ポイント未満	相当低い	･･･	－７ポイント以下
同様	･･･	±１ポイント			

調査に準じ、問題を学習指導要領の内容（または領域）、評価の観点、問題形式と分類し、区分別に集計している。各教科の領域は、学習指導要領の内容（または領域）内の区分とし、新たな領域は過去の同系統のデータを参考にすることとした。なお、従前と同じ名称の場合は過去のデータを関連づけて比較・検討しているが、領域間で移行した学習内容もあり、領域名が同じであっても同一の内容ではないことを付け加えておく。

(1) 小学校教科全体

（　）は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値

全道：道内の全公立小学校　　全国：国内の全公立小学校

小学校教科全体		国語	算数
平均正答数	千歳市	9.4 問/14 問	9.9 問/16 問
	全　道	9.3 問/14 問	9.7 問/16 問
	全　国	9.5 問/14 問	10.1 問/16 問
平均正答率	千歳市	67%(67.4%)	62%(61.8%)
	全　道	67%(66.8%)	61%(60.6%)
	全　国	67.7%	63.4%
全道との比較		同様	ほぼ同様（上位）
全国との比較		同様	ほぼ同様（下位）

国語については、全国を 0.3 ポイント下回り、全国と比較して前回の「ほぼ同様（下位）」から「同様」の段階となった。算数については、全国を 1.6 ポイント下回り、全国と比較して前回の「やや低い」から「ほぼ同様（下位）」の段階となった。

(2) 中学校教科全体

（　）は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値

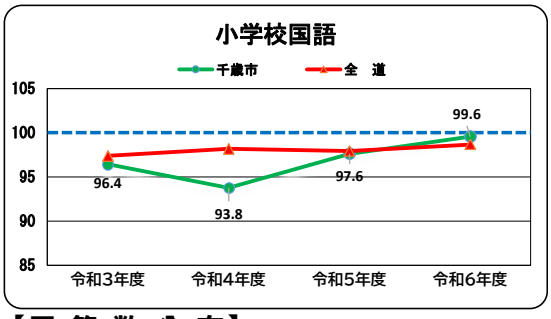
全道：道内の全公立中学校　　全国：国内の全公立中学校

中学校教科全体		国語	数学
平均正答数	千歳市	8.2 問/15 問	8.0 問/16 問
	全　道	8.6 問/15 問	8.2 問/16 問
	全　国	8.7 問/15 問	8.4 問/16 問
平均正答率	千歳市	55%(54.9%)	50%(50.1%)
	全　道	58%(57.6%)	51%(51.0%)
	全　国	58.1%	52.5%
全道との比較		ほぼ同様（下位）	同様
全国との比較		やや低い	ほぼ同様（下位）

国語については、全国を 3.2 ポイント下回り、全国と比較し前回の「ほぼ同様（下位）」から「やや低い」の段階となった。数学については、全国を 2.4 ポイント下回り、全国と比較し「低い」から「ほぼ同様（下位）」の段階となった。

(3) 小学校国語

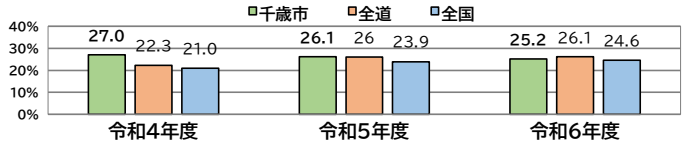
平均正答率は、今回、全国との差が縮まり、前回の「ほぼ同様（下位）」から「同様」という結果となった。区分別では、知識・技能「言葉の特徴・使い方」、知識・技能「我が国の言語文化」、思考･判断･表現「読むこと」の３つの領域が全国を上回った。



【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
千歳市	62.4	61.5	65.6	67.4
	96.4	93.8	97.6	99.6
全　道	63	64.4	65.8	66.8
	97.4	98.2	97.9	98.7
全　国	64.7	65.6	67.2	67.7
	100	100	100	100

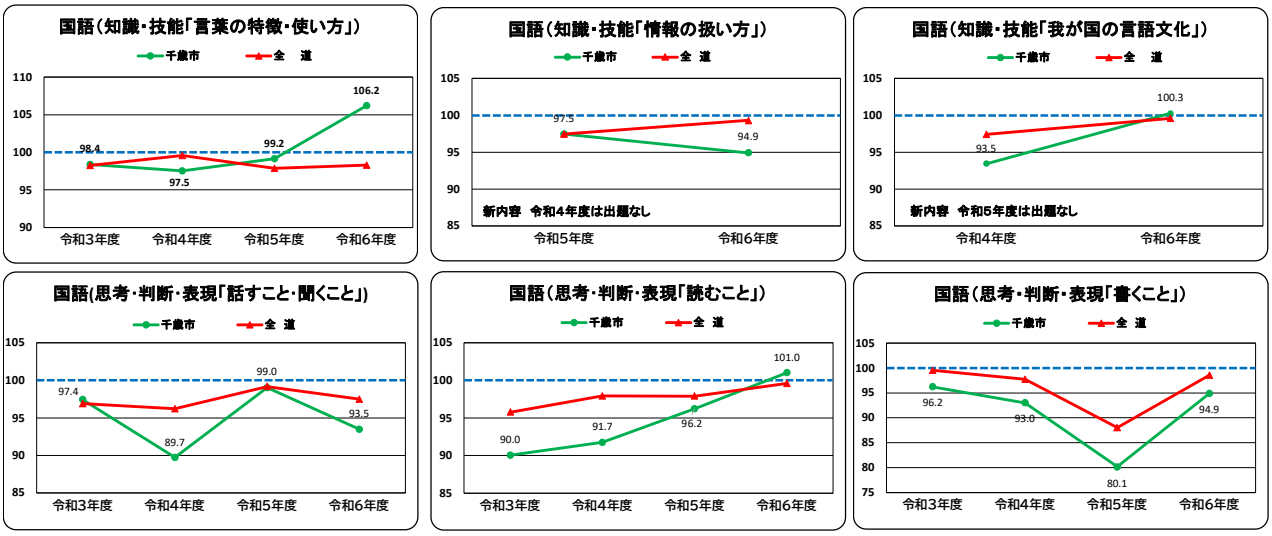
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



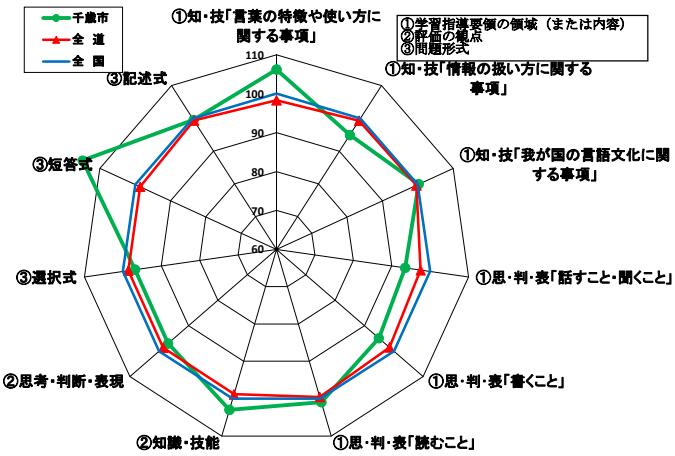
【正 答 数 分 布】

正答数の少ない層の割合は、前回より０.９ポイント減少したが、全国より０.６ポイント多い状況にある。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況となっている。

【区分別正答率の経年変化】



【区分別集計結果】



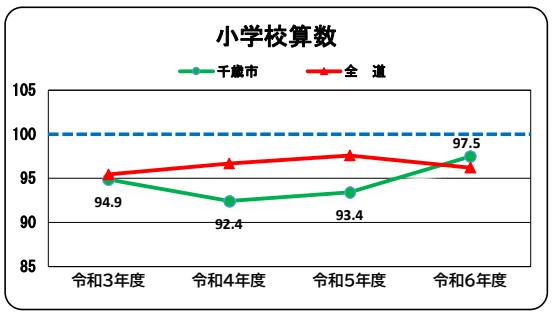
「言葉の特徴や使い方に関する事項」は漢字を正しく使う問題で全国を大きく上回った。「読むこと」は、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができるかどうかをみる問題が全国の正答率を上回るなど、区分全体で前回を 4.8 上回り、全国平均を上回った。「話すこと・聞くこと」は、全３問が全国の正答率を下回り、区分全体で前回を 5.5 下回った。特に、目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討する問題において、差が大きかった。「書くこと」は前回を 14.8 上回ったものの、依然として全国を 5.1 下回り、令和３年度の成績に届かなかった。目的や意図に応じて、自分の考えが伝わるようにするための書き表し方の工夫に課題がある。無解答率は、すべての問題で全国を下回った。

評価の観点では、「知識・技能」が全国を 3.0 上回った。「思考・判断・表現」は前回を上回ったが、全国を 3.0 下回った。

問題形式では、短答式が全国を 14.9 上回った。記述式は前回を上回ったが、全国を 0.5 下回り、選択式が前回及び全国を下回った。

(4) 小学校算数

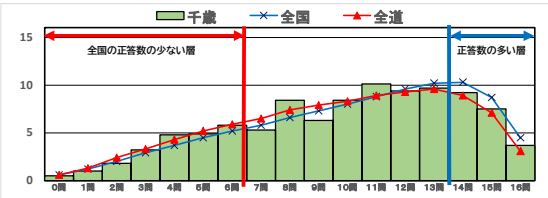
平均正答率は、今回、全国との差が縮まり、前回の「やや低い」から「ほぼ同様（下位）」となった。すべての領域で前回を上回った。特に、「図形」は全国平均を上回った。



【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

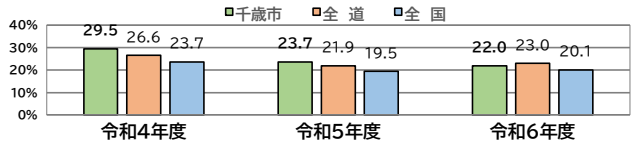
	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
千歳市	66.6	58.4	58.4	61.8
	94.9	92.4	93.4	97.5
全 道	67	61.1	61	60.6
	95.4	96.7	97.6	95.6
全 国	70.2	63.2	62.5	63.4
	100	100	100	100

【正 答 数 分 布】

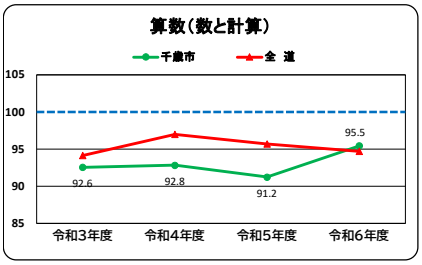


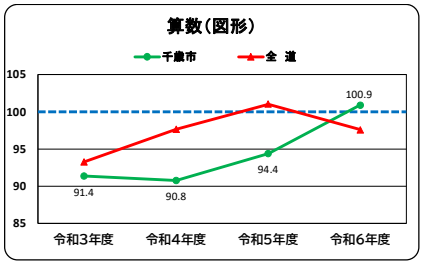
正答数の少ない層の割合は、前回より１.７ポイント改善したが、全国より１.９ポイント多い状況である。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況となっている。

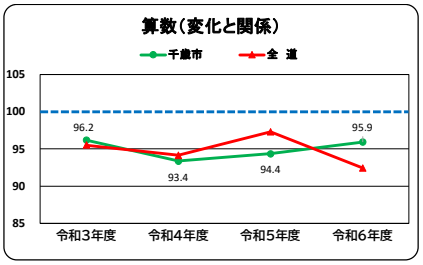
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

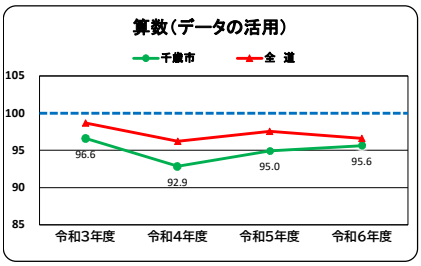


【区分別正答率の経年変化】

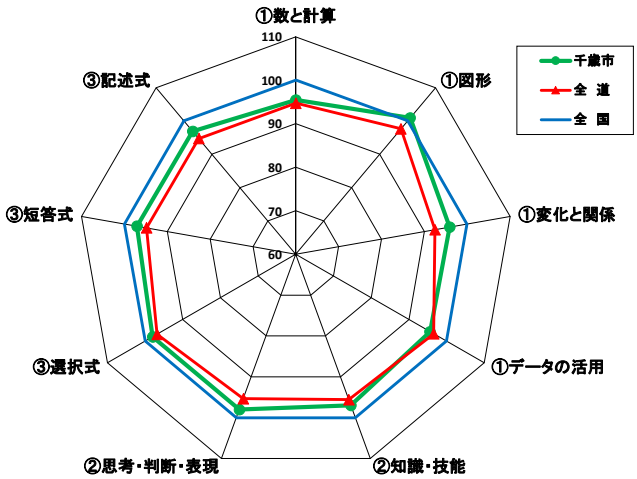








【区分別集計結果】



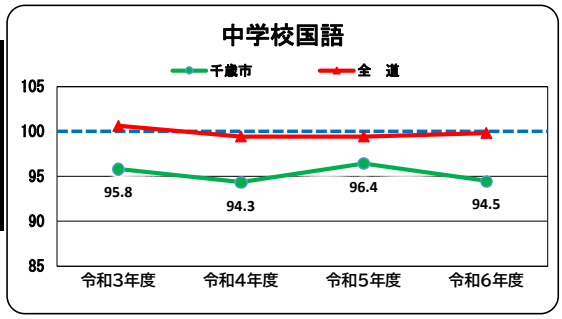
「図形」では、直方体の見取図以外の４問中３問で全国正答率を上回った。全国平均を 100 とした指数が領域全体で 6.5 ポイント上昇し、全国を上回った。領域の正答率が全国を上回ったのは平成 31 年度以降で初めてである。「数と計算」は、全国を上回る問題はなかったが、全国との差を縮めた。除法の計算（除数が小数である場合）の正答率が低かった。「変化と関係」では、速さに関する出題（３問）のうち、道のりと時間の関係を考察する問題で全国を上回った。領域全体では全国との差を縮めた。一方、速さについて、比べ方を考えて判断した理由の記述、速さの意味を理解することは課題が見られた。「データの活用」は全国との差を縮めたが、全国を上回る問題はなかった。表から必要な数値を読み取って桜の開花予想日を書く問題の正答率が低かった。全国との差が最も大きい領域となっている。無解答率は、すべての問題で全国を下回った。

評価の観点では、「知識・技能」よりも全国との差が大きかった「思考・判断・表現」が改善し、前回を 6.0 上回った。

問題形式では、前回、全国との差が大きく、課題となっていた記述式が 9.1 上回り、大きな改善となった。選択式、記述式と同様、いずれも全国平均に達していない状況であるが、全国正答率との差を縮めている。

(5) 中学校国語

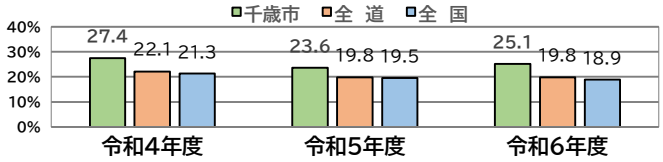
平均正答率は、今回、全国との差が広がり、前回の「ほぼ同様（下位）」から「やや低い」の状況となった。区分別では、知識・技能「言葉の特徴や使い方に関する事項」と思考･判断･表現「話すこと･聞くこと」が前回を上回り、全国との差を縮めた。



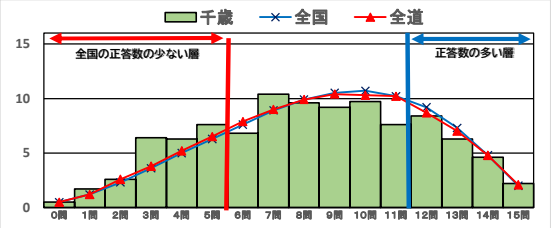
【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
千歳市	61.9	65.1	67.3	54.9
	95.8	94.3	96.4	94.5
全 道	65	68.6	69.4	57.6
	100.6	99.4	99.4	99.1
全 国	64.6	69.0	69.8	58.1
	100	100	100	100

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合】

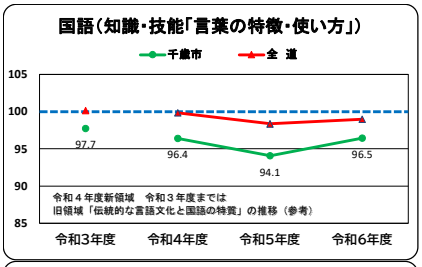


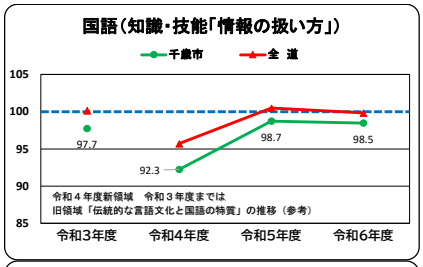
【正 答 数 分 布】

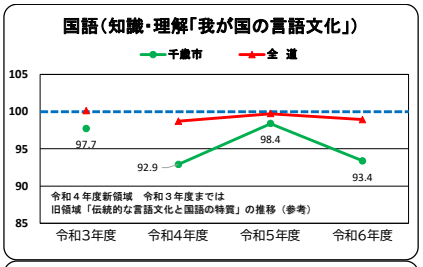


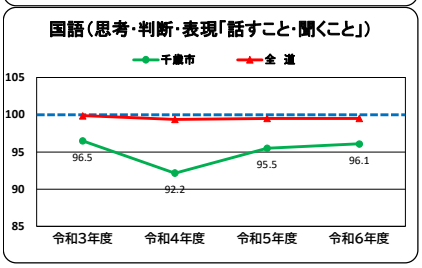
正答数の少ない層の割合は、前回より１.５ポイント増加し、全国より４.１ポイント多い。正答数の多い層の割合は、全国より少ない。

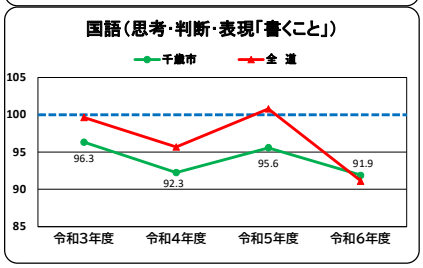
【区分別正答率の経年変化】

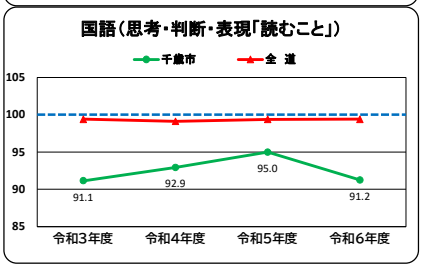






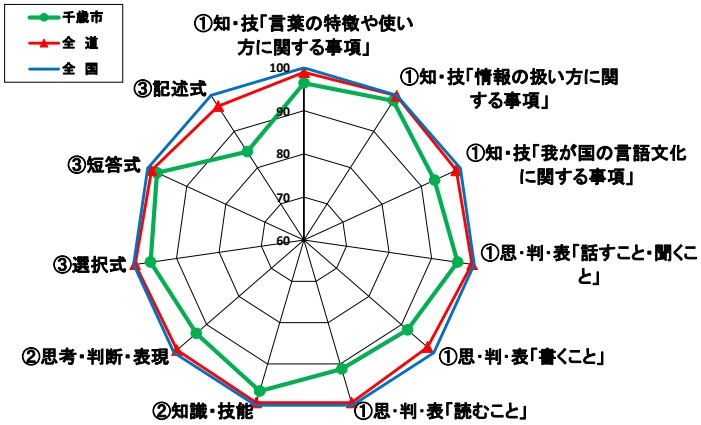






６つの区分のうち、前回を上回ったのは「言葉の特徴や使い方に関する事項」と「話すこと・聞くこと」の２区分に留まった。しかし、「話すこと・聞くこと」では、話合い活動に関した問題（３問）のうち２問で全国正答率を上回った。「情報の扱い方に関する事項」では、意見と根拠など情報と情報との関係を問う問題で全国正答率を上回った。一方、「読むこと」は、全国との差が最も大きかった。本文中の図の役割についての問題の平均正答率が最も低く、文章と図とを結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈することに課題が見られた。次いで、「書くこと」が全国平均との差が大きかった。自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことに課題が見られた。

【区分別集計結果】

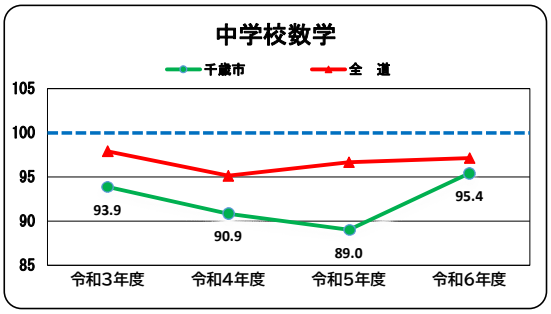


評価の観点では、「知識・技能」に比べて全国との差が大きかった「思考・判断・表現」で差が拡大した。「書くこと」「読むこと」領域における「思考・判断・表現」の問題の正答率が影響している。

問題形式では、記述式が前回を 9.9 ポイント下回り、必要な情報に着目して要約する問題、自分の考えが伝わる文章になるように工夫する問題、ともに条件を満たさない解答が多く、全国の正答率との差が大きかった。無解答率も高かった。選択式、短答式も前回を下回った。

(6) 中学校数学

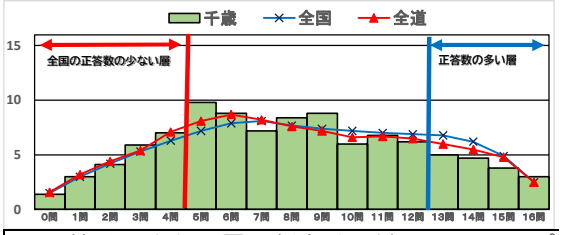
平均正答率は、今回、全国との差が小さくなり、前回の「低い」から「ほぼ同様（下位）」の状況となった。すべての領域で前回を上回った。特に、「データの活用」は全国同様となった。



【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

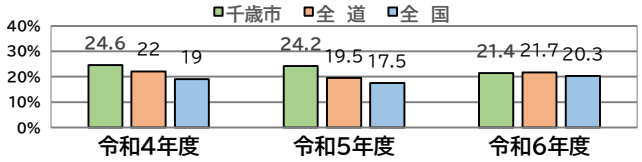
	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
千歳市	53.7	46.7	45.4	50.1
	93.9	90.9	89.0	95.4
全 道	56.0	48.9	49.3	51.0
	97.9	95.1	96.7	97.1
全 国	57.2	51.4	51.0	52.5
	100	100	100	100

【正 答 数 分 布】

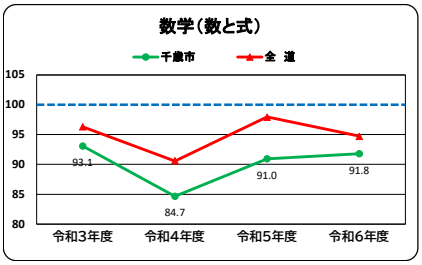


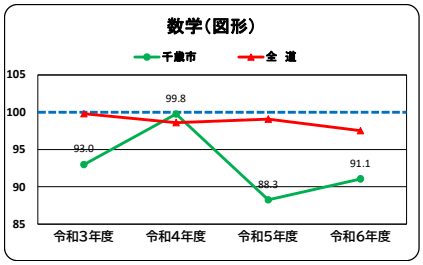
正答数の少ない層の割合は、前回より２.８ポイント改善したが、全国より１.１ポイント多い状況である。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況となっている。

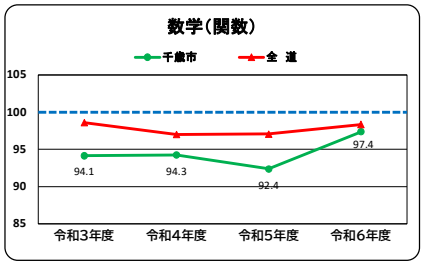
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合】

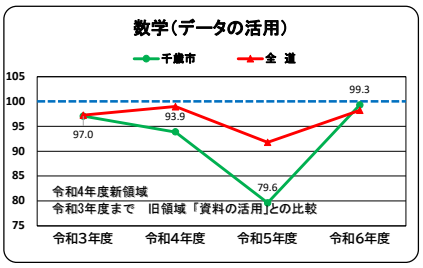


【区分別正答率の経年変化】

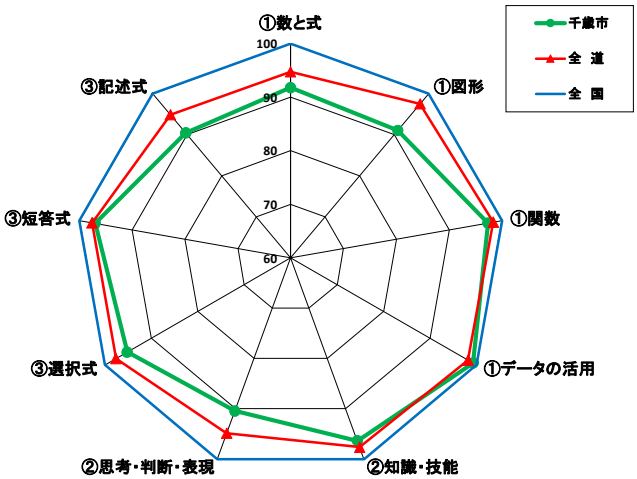








【区分別集計結果】



「数と式」は、前回を 0.8 上回ったが、全国を大きく下回っている状況にある。文字を用いた式で表す問題、統合的・発展的に考え、成り立つ事柄を数学的な表現を用いて説明する問題に課題が見られる。「図形」は、前回を 2.8 上回ったが、回転移動の問題、角の大きさに着目して新たな性質を見いだす問題、三角形の合同を基にして証明する問題、いずれにも課題が見られた。「関数」は、前回を 5.0 上回り、全国との差を縮めたものの、一次関数のグラフの傾きや交点の意味を事象に即して数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することに課題がある。「データの活用」では、最頻値を求める問題の正答率が全国平均を 5.1 ポイント上回り、領域全体の上昇に影響した。しかし、５つの箱ひげ図の比較など他の問題は全国を下回っていて、依然として課題が残る状況にある。

評価の観点では、「知識・技能」に比べて「思考・判断・表現」が全国との差が大きい傾向が続いている。前回を 6.5 上回ったものの、全国との差は 9.6 と依然として大きい。

記述式問題は、平均正答率が最も低く、全国平均との差が最も大きい。特に、１次関数の式やグラフを用いた問題解決の方法を説明する問題の正答率が低かった。また、三角形の合同を基にして、筋道を立てて考え、証明する問題は無解答率が高く、課題が見られた。

3　児童生徒質問調査の結果

令和６年度の調査では、「学習習慣・学習環境・ＩＣＴを活用した学習状況等」が９項目、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況」が１項目、「学習に対する興味・関心や授業の理解度等」の小学校国語が２項目、中学校国語が４項目、算数・数学が２項目、理科が１項目、新たな調査項目となっている。今回は、昨年度に引き続き４観点で小・中学校別に示したが、⑵の「学習習慣、学習環境」に「ＩＣＴを活用した学習状況」を加えた。

「学習習慣・学習環境等」の観点において、家庭での学習時間については千歳市ＰＴＡ家庭生活宣言とタイアップしていることを考慮し、「１時間以上」学習している割合について結果を示した。家庭における読書については、読書量を問う質問が削除された。

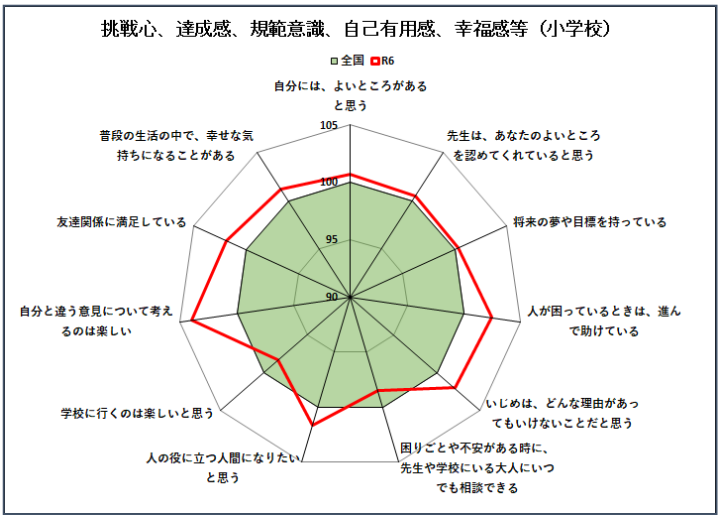
「学習に対する興味・関心」については、国語、算数・数学、理科、英語で概ね共通した項目で質問項目が作成されているが、中学校英語での質問は削除されている。「授業の理解度等」については国語、算数、理科についてまとめ、さらに中学校の英語を別に示した。

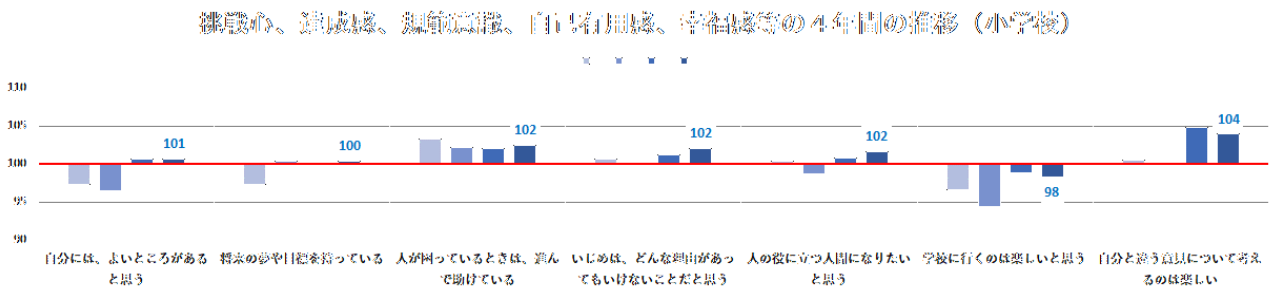
⑴　挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等

①　小学校

全ての項目が『標準的』なレベルにある。

４年間の推移を見ると概ね向上傾向にはあるが、前回との比較では「自分と違う意見について考えるのは楽しい」という項目は低下傾向にある。

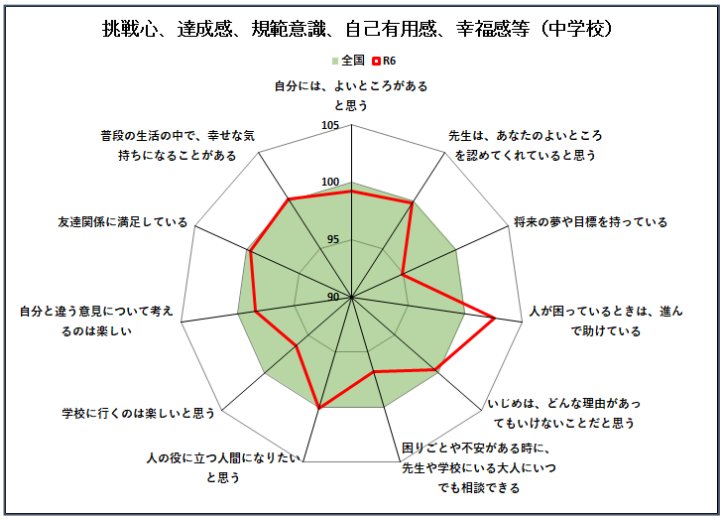


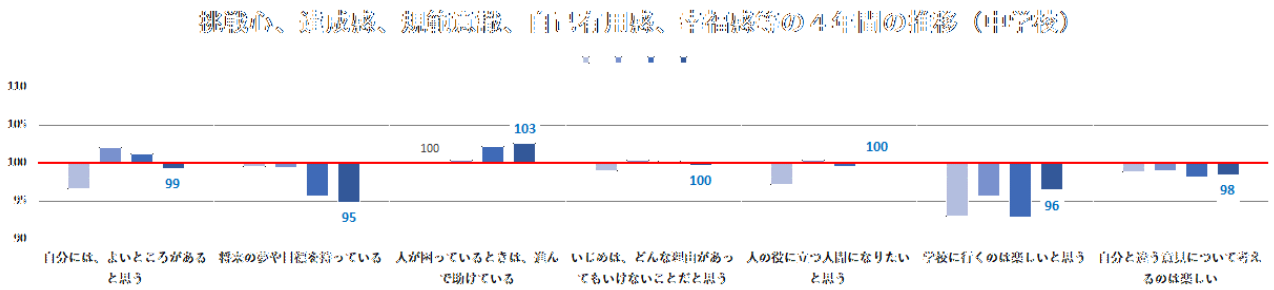


②　中学校

概ね『標準的』なレベルにあるが、「将来の夢や目標を持っている」という項目は『やや低い』レベルにある。

４年間の推移を見ると、「人が困っているときは進んで助けている」「学校に行くのは楽しいと思う」という項目は向上傾向にあるが、「自分にはよいところがあると思う」「将来の夢や目標を持っている」という項目は低下傾向にある。





(2)　学習習慣、学習環境、ＩＣＴを活用した学習状況等

①　小学校

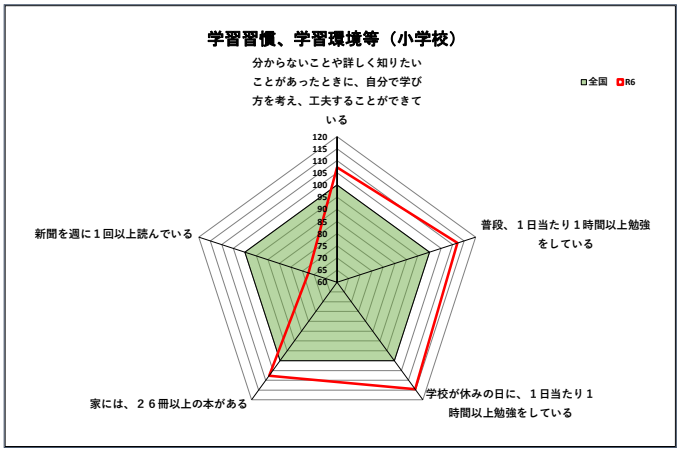
「自分で学び方を考え、工夫する」ことについては、全国平均より『やや高い』レベルにある。

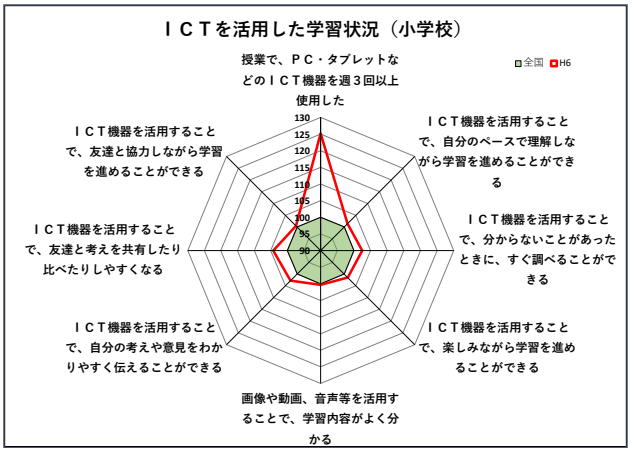
「家庭学習」については、全国平均より『高い』レベルにあり、向上傾向にある。

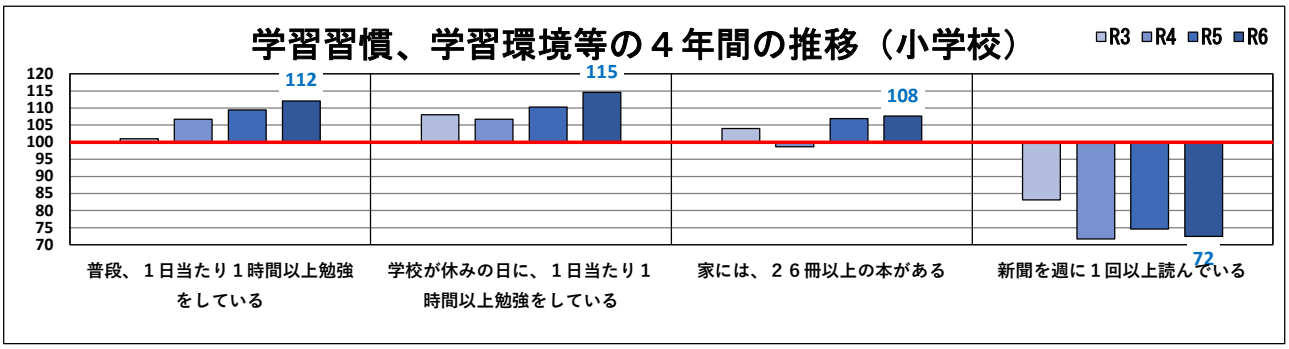
「新聞を読む習慣」については、全国平均より『かなり低い』レベルにある。

「ＩＣＴの活用状況」は、概ね『標準的』であるが、「授業で週３回以上活用」している状況は全国平均より『かなり高い』レベルにある。

４年間の推移を見ると、「新聞を読む習慣」以外は概ね向上傾向にある。







②　中学校

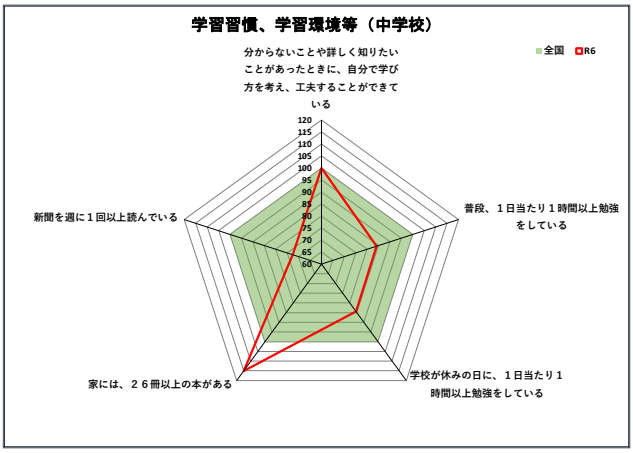
「自分で学び方を考え、工夫する」ことについては、『標準的』なレベルにある。

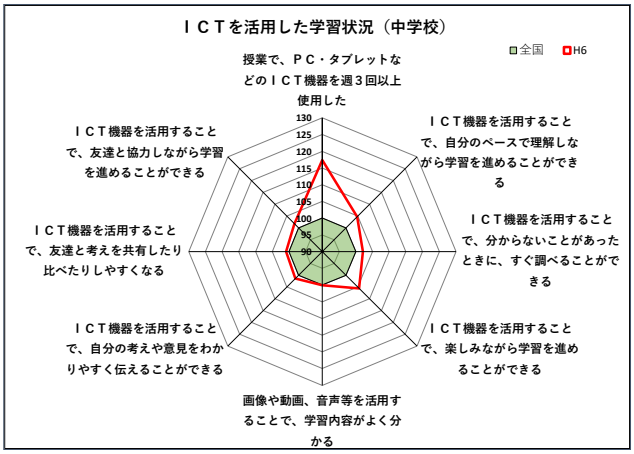
「家庭学習」については、全国平均より『かなり低い』レベルにあるが、昨年度と比較すると向上傾向にある。

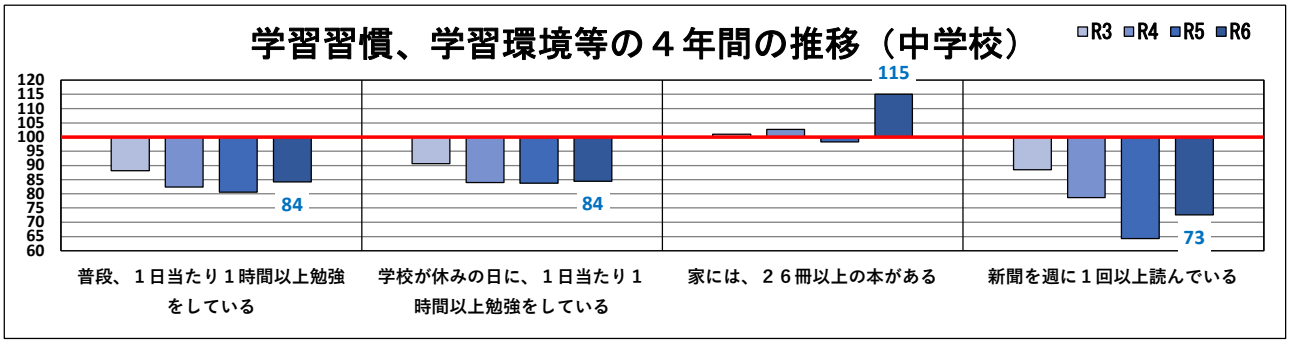
「新聞を読む習慣」については、全国平均より『かなり低い』レベルにあるが、昨年度と比較すると向上傾向にある。

「ＩＣＴの活用状況」は、概ね『標準的』であるが、「授業で週３回以上活用」している状況は全国平均より『かなり高い』レベル、活用することで「自分のペースで理解しながら学習を進めることができる」「楽しみながら学習を進めることができる」については『やや高い』レベルにある。

４年間の推移を見ると、４つの項目は向上傾向にある。





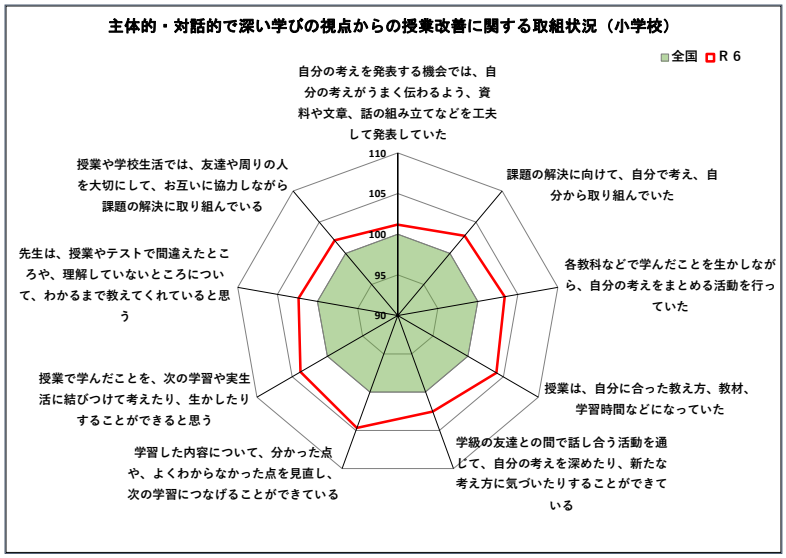


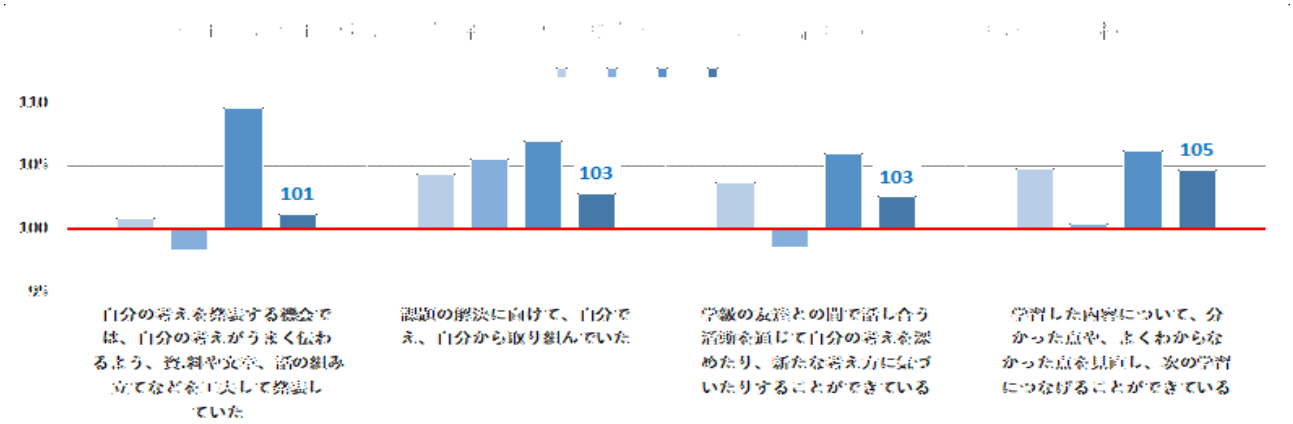
(3)　主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

①　小学校

概ね『標準的』なレベルにあり、その中で「学習した内容を次の学習につなげる」ことについては全国平均より『やや高い』レベルにある。

４年間の推移を見ると、４つの項目は全国平均をやや上回ってはいるが、前回との比較では低下傾向にある。

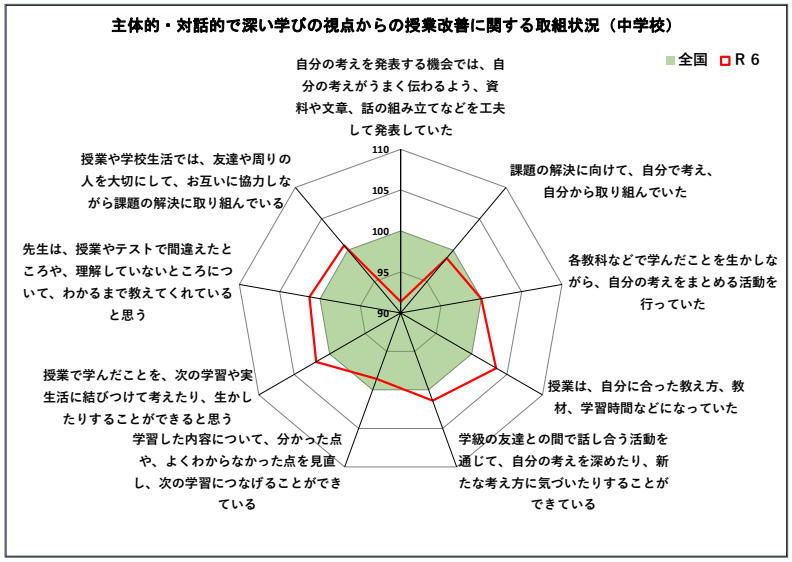


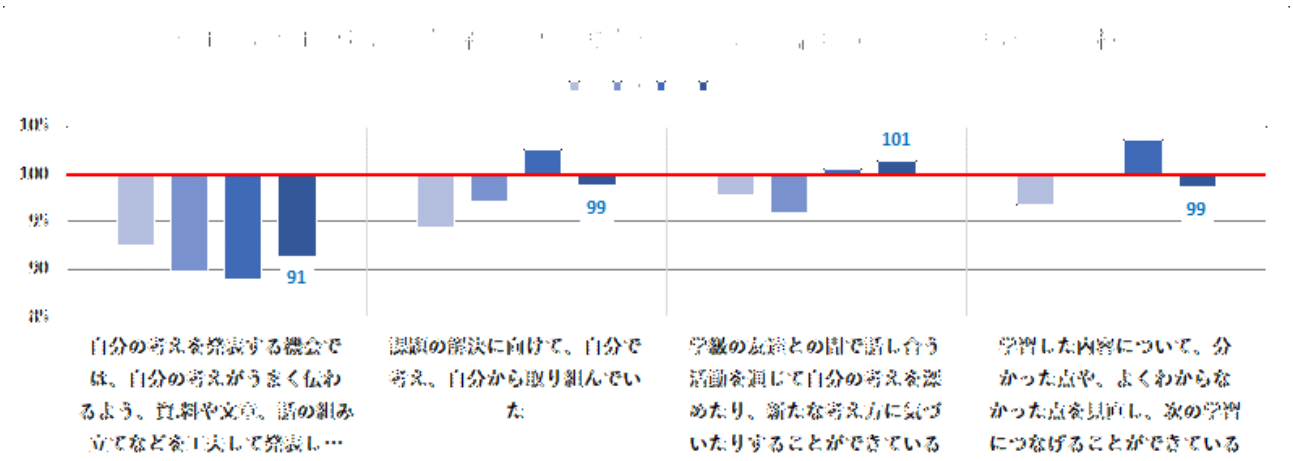


② 中学校

「自分の考えがうまく伝わるように工夫して発表する」事については全国平均より『やや低い』レベルにあるが、他の項目は『標準的』なレベルにある。

４年間の推移を見ると、概ね向上傾向にあるが、「課題の解決に向けて自分で考え取り組む」「学習した内容を次の学習につなげる」という項目は、前回との比較では低下傾向にある。



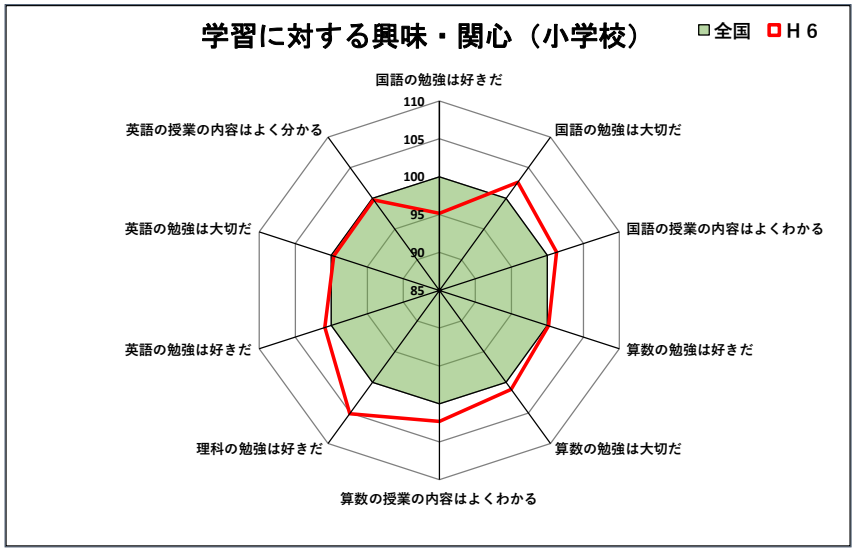


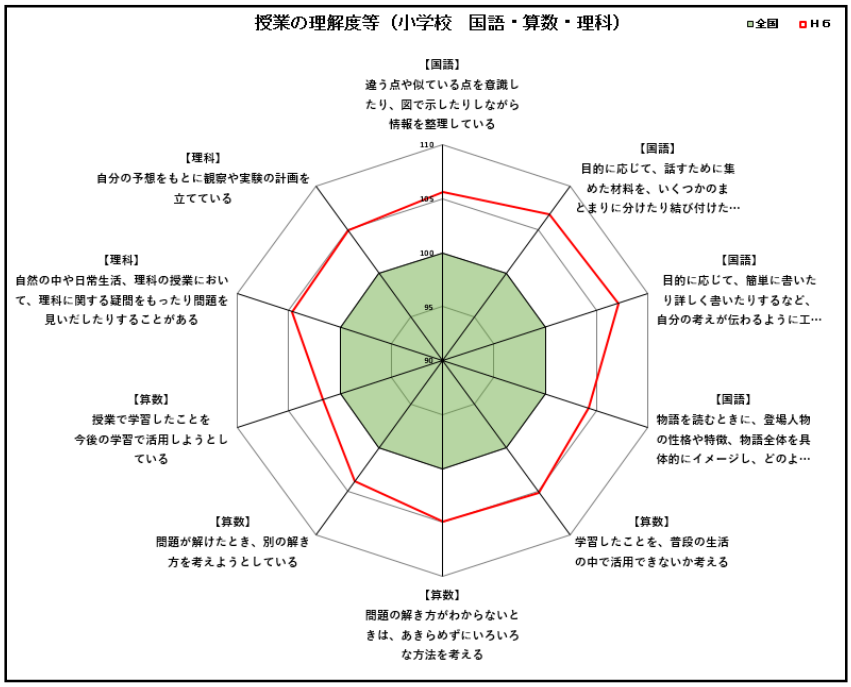
(4) 学習に対する興味・関心や授業の理解度等

① 小学校

国語・算数・理科・英語に対する興味・関心に関しては、概ね『標準的』であるが、「理科の勉強は好きだ」ということについては全国平均より『やや高い』レベルにある。

授業の理解度等については、どの項目も全国平均以上のレベルにある。特に、国語の「情報を整理する」「目的に応じて伝える内容を考える」「目的に応じて自分の考えが伝わるように文章を書く」算数の「学習したことを生活の中で活用する」「問題の解き方はいろいろな方法を考える」事については、全国平均より『やや高い』レベルにある。

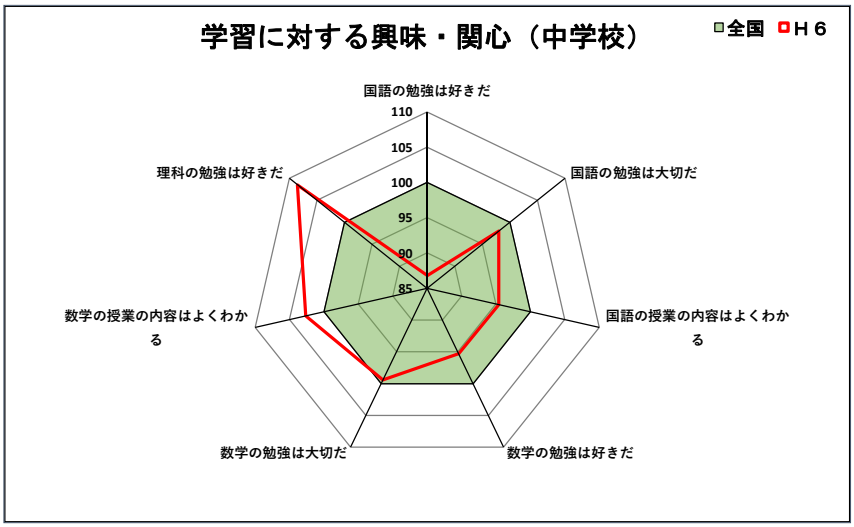


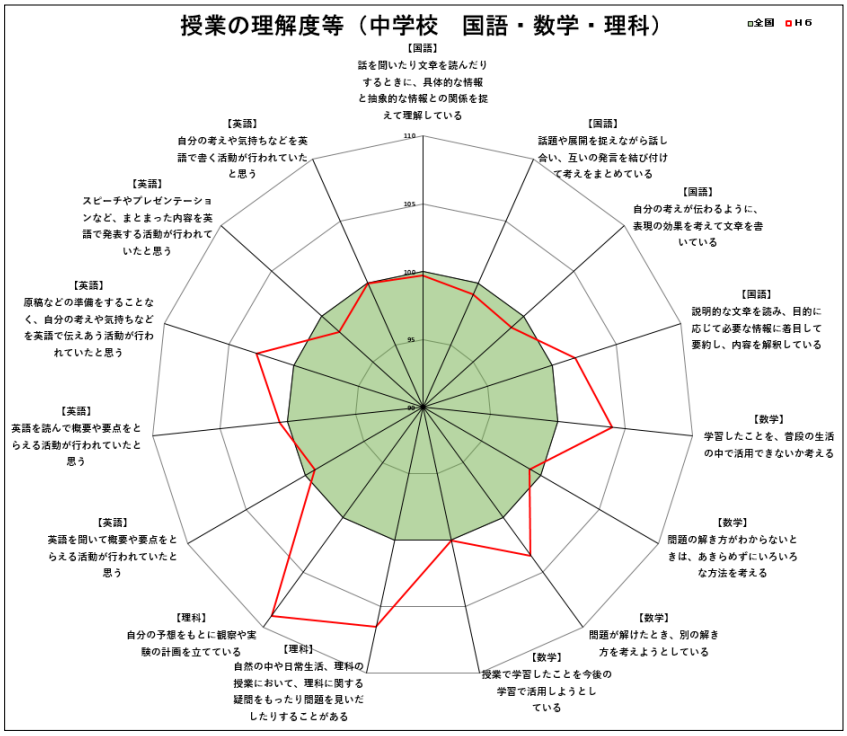


②　中学校

学習に対する興味・関心に関して、「数学の勉強は好き」「国語・数学の勉強は大切」「国語・数学の授業の内容はよくわかる」という項目については『標準的』なレベルにある。「理科の勉強は好きだ」という項目については全国平均より『やや高い』レベルにあるが、「国語の勉強は好きだ」ということについては全国平均より『低い』レベルにある。

授業の理解度等については、国語・数学・英語は『標準的』なレベルにあるが、「理科」は『やや高い』レベルにある。



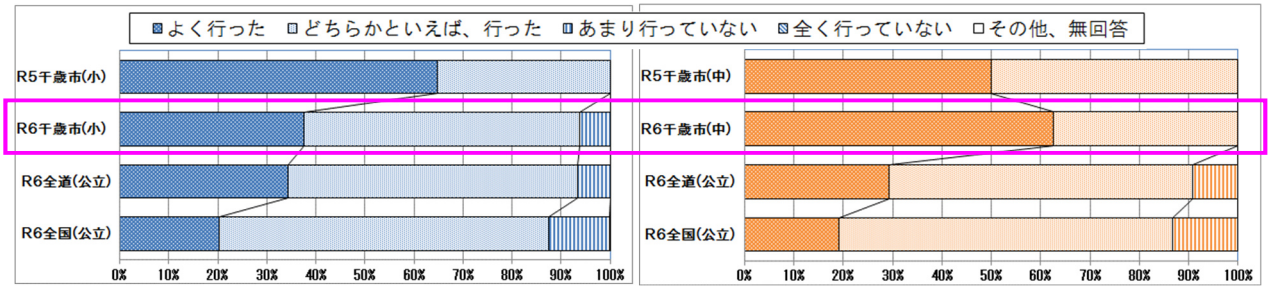


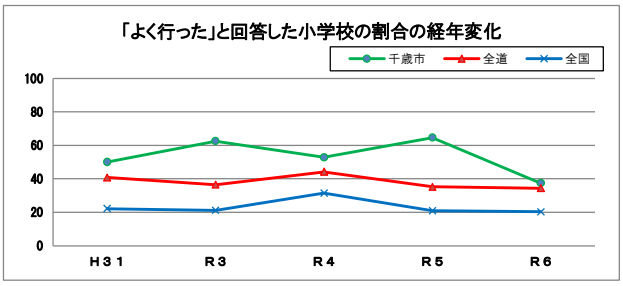
4　学校質問調査の結果

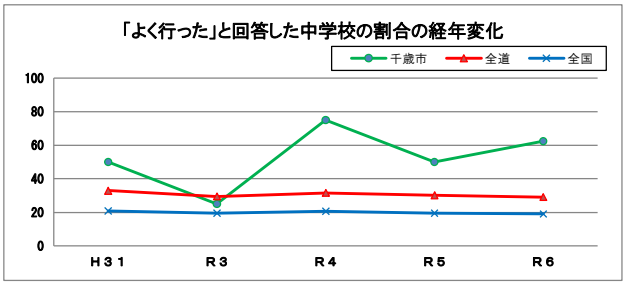
1　千歳市学力向上検討委員会の学校への提言に関して

①　探究型・対話型授業への転換

質問番号 ３４	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか。







いずれも小・中学校ともに全国を上回っているが、一層の充実が求められる

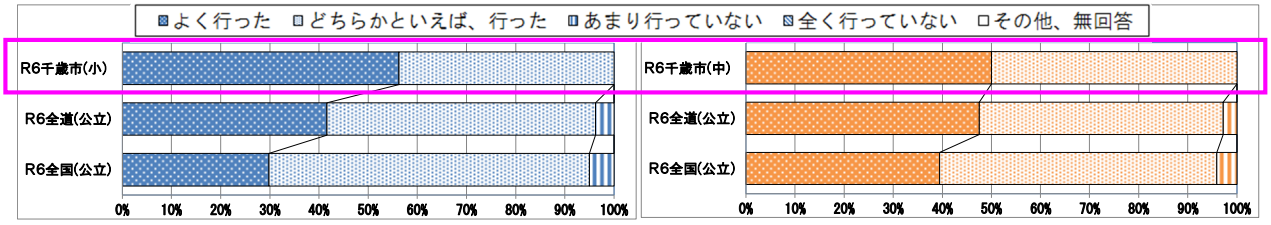
「習得・探究の学習過程を見通した指導方法の改善および工夫」を「よく行った」と回答した学校の割合は、小学校は 37.5%で全国（20.3%）を上回り、中学校においても 62.5%と全国（19.1%）を上回っている。昨年との比較では小学校は 27.2 ポイント減少し、中学校は 12.5 ポイント増加した。

学習指導要領がめざす「知識・技能の習得」と「思考力・判断力・表現力の育成」には、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。市内ではほとんどの学校が取組に肯定的な回答であるが、一部の学校では組織的な授業改善に苦慮していることが考えられ、本市がめざす「探究型・対話型授業」の実現に向けて、各校の取組の一層の充実が求められる。

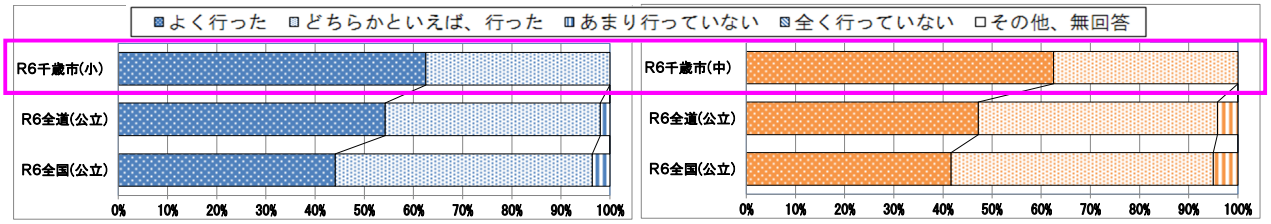
②　読解力・記述力の向上　～国語、算数・数学の指導

質問番号 小４３	国語の授業において、前年度までに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して文章を書くことができるような指導を行いましたか。

質問番号 中４３	国語の授業において、前年度までに、自分の考えが伝わるように、表現の効果を考えて文章を書く指導を行いましたか。



質問番号 小47　中47	算数(数学)の授業において、問題の答えを求めさせるだけではなく、どのように考え、その答えになったのかなどについて、児童(生徒)に筋道を立てて説明させるような授業を行いましたか。



「読解力・記述力」向上に向けた組織的・継続的な指導が求められる

国語の「(根拠を明確にして) 自分の考えを書いたり表現を工夫したりする授業」について、「よく行った」と回答した小学校は 56.3%で、全国（29.8%）を 26.5 ポイント上回り、中学校は 50.0%で全国（39.4%）を 10.6 ポイント上回った。

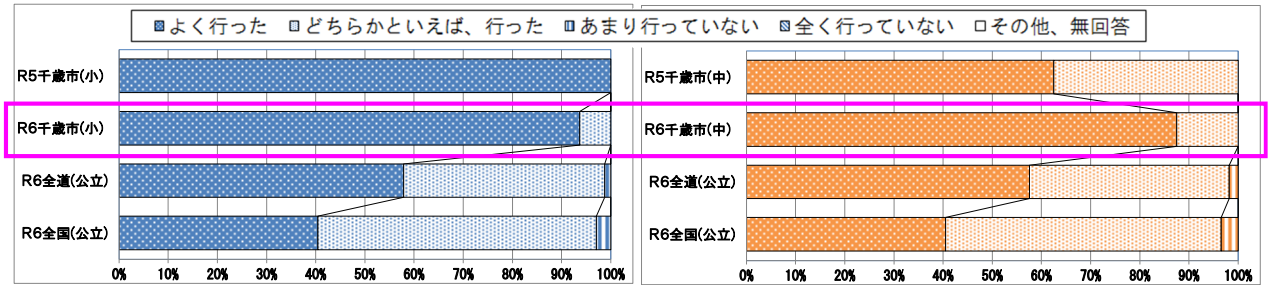
算数・数学の「問題を解くことに加えて、その根拠を筋道立てて説明させる授業」について、「よく行った」と回答した学校は、小学校は 62.5%で全国（44.0%）を 18.5 ポイント上回り、中学校は 62.5%で全国（41.6%）を 20.9 ポイント上回っている。国語と算数・数学ともに、「どちらかといえば行った」を加えると、全校で「読解力・記述力」の向上をめざした授業が行われている。

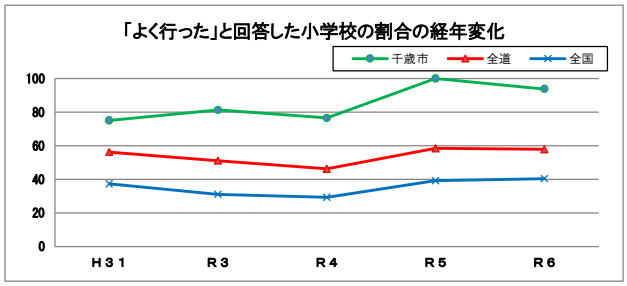
一方で、読解力については、問いと正対することや複数資料の要旨を把握して必要事項を見出すこと、記述力については、根拠を明確にした文や条件に応じて自分の考えを理由づけることなどが、依然として課題となっている。

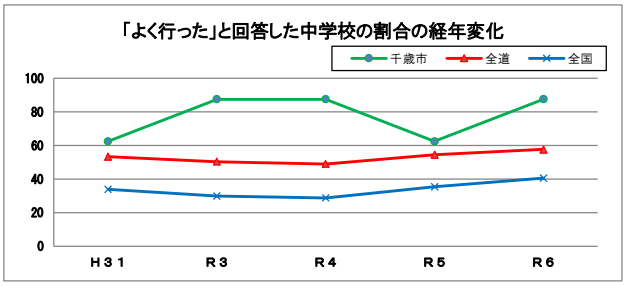
読解力と記述力は短時間で高められるものではなく、全校で計画的に指導を積み重ねる必要がある。児童生徒に記述させる場面や与える条件の設定、よりよい考えを導くための対話の機会の設定など、今後も発達段階に応じて、組織的かつ継続的な取組が求められる。

③　「学校改善プラン」の確実な実行

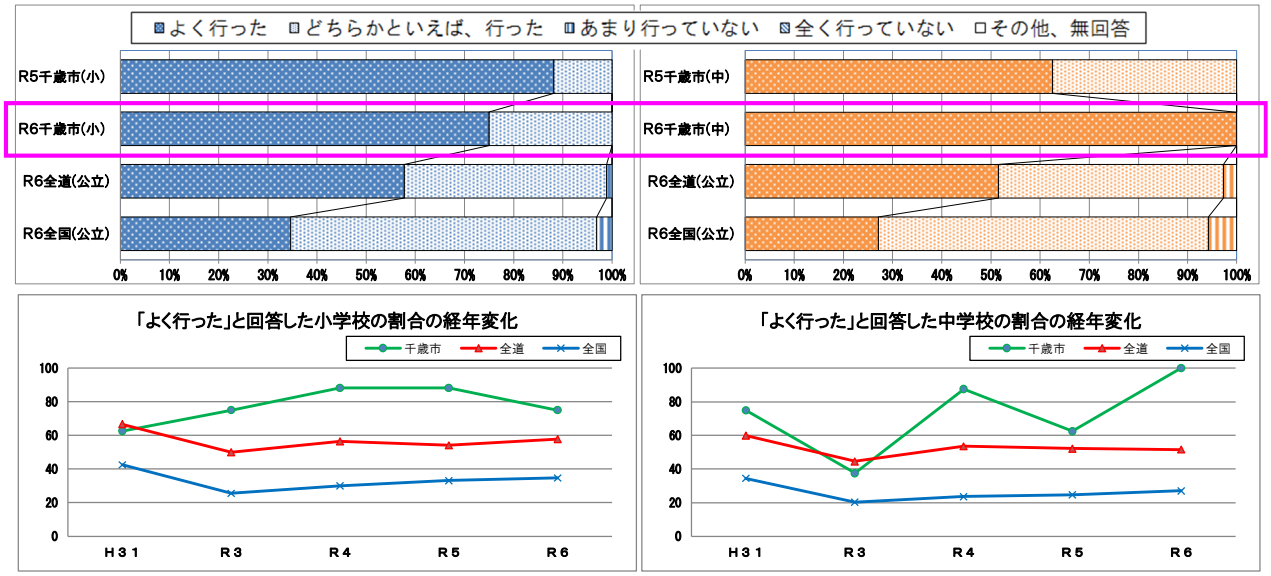
質問番号 １３	児童（生徒）の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立していますか。







質問番号 小74　中78	全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用しましたか。



小・中学校ともに全国を大きく上回る取組が組織的にされている

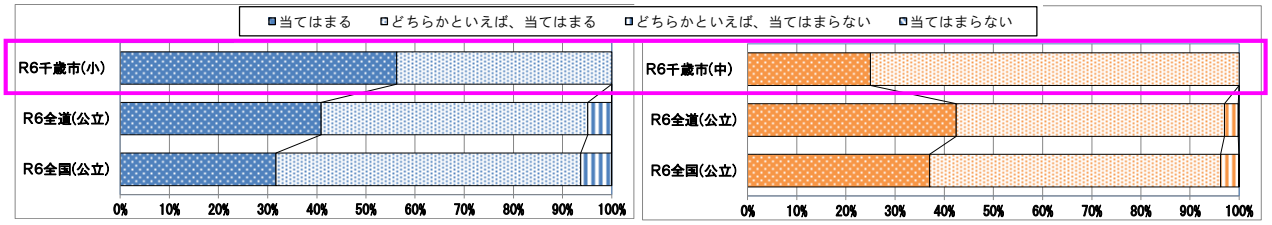
「学校改善プラン」によるＰＤＣＡサイクルの確立は、「よく行った」と回答した小学校が 93.8%と昨年より減少したが、中学校は 87.5%と上昇した。小・中学校ともに全国（小 40.4%、中 40.5%）を大きく上回っており、「どちらかといえば、行った」を含めると全校で肯定的な回答となっている。

また、「学校改善プラン」の改訂に対する全国学力・学習状況調査結果の活用については、「よく行った」と回答した小学校は 75.0%、中学校は 100%となった。こちらも全校で肯定的な回答となっている。

全国学力・学習状況調査は、学習指導要領で育成を目指す資質・能力を踏まえた出題となっていることから、短期・中期の具体的な方策、評価の指標や手順を設定した「学校改善プラン」の策定が求められる。市内各校では、調査結果を該当学年・教科の授業改善にとどめず、成果と課題を共有して組織的に取り組んでいる取組を進めていると考えられる。今後も「学校改善プランの策定」が目的とならないよう、徹底した進行管理のもとで検証改善サイクルの確実な運用を図ることが大切である。

④　ハイパーＱＵ検査を活用した学年・学級経営の充実

質問番号 ２８	児童（生徒）は、授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組めていると思いますか



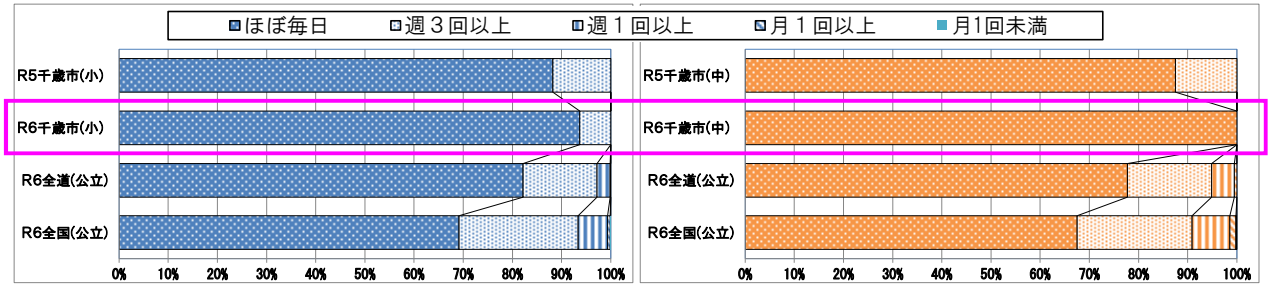
小・中学校ともに肯定的な回答が全国を上回る

「当てはまる」と回答した小学校は 56.3%、中学校は 25.0%となり、全国（小 31.7%、中 37.0%）と比較して中学校が下回っているが、「どちらかといえば、当てはまる」を含めた肯定的な回答は小・中学校ともに 100%となっている。

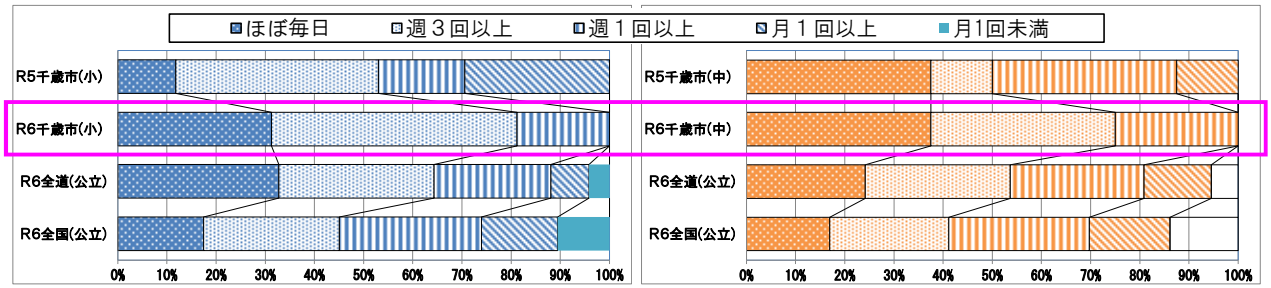
互いを認め合う支持的風土が醸成されることは、探究型・対話型授業の基盤となる集団での学びの充実につながるものであり、自尊感情や自己有用感が高まることにより、いじめや不登校の未然防止にも寄与すると考えられる。本市で取り組むハイパーＱＵ検査の客観的な実態把握を活用し、望ましい集団の育成を組織的に取り組む必要がある。

⑤　ＩＣＴ機器の効果的な活用

質問番号 小56　中60	調査対象学年の児童（生徒）に対し、前年度までに、児童（生徒）一人一人に配備されたＰＣ・タブレットなどのＩＣＴ機器を、授業でどの程度活用しましたか。



質問番号 小60　中63	調査対象学年の児童（生徒）に対し、前年度までに、児童（生徒）同士がやりとりする場面では、ＰＣ・タブレットなどのＩＣＴ機器を、授業でどの程度活用させていますか。



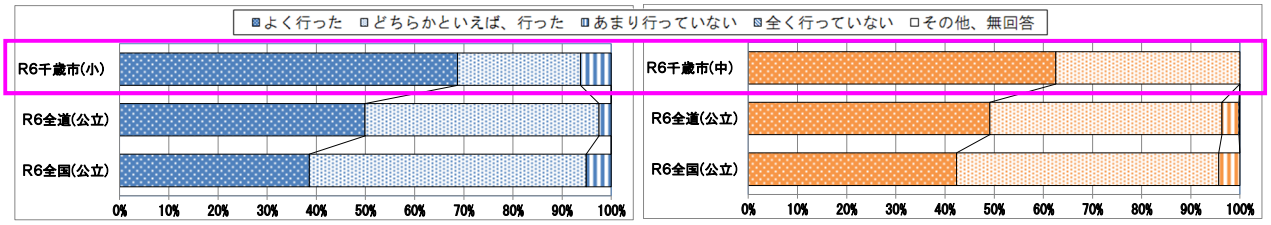
小・中学校とも学習者用コンピュータ等のＩＣＴ活用は日常に

学習者用コンピュータを活用した授業を「ほぼ毎日」と回答した学校は、小学校 93.8%、中学校 100%であり、いずれも全国（小 69.0%、中 67.5%）を上回っている。研修やＩＣＴサポーターの活用もあり、児童生徒が考えをまとめる場面や、教師と児童生徒のやり取りをする場面などにおいて、学習者用コンピュータの活用がいっそう進み、電子黒板などの他のＩＣＴ機器と同様に日常になったといえる。

一方で、学習者用コンピュータを児童生徒同士が相互に意見交換するために活用することは、「ほぼ毎日」と回答した学校は、小学校 31.3%、中学校 37.5%にとどまっている。いずれも全国（小 17.4%、中 16.9%）を上回っているものの、さらなる活用が求められる。

⑥　習熟度別少人数指導の充実

質問番号 ４８	前年度に、算数・数学の授業において、児童（生徒）がどのようなことにつまずくのかを想定した指導を行いましたか。



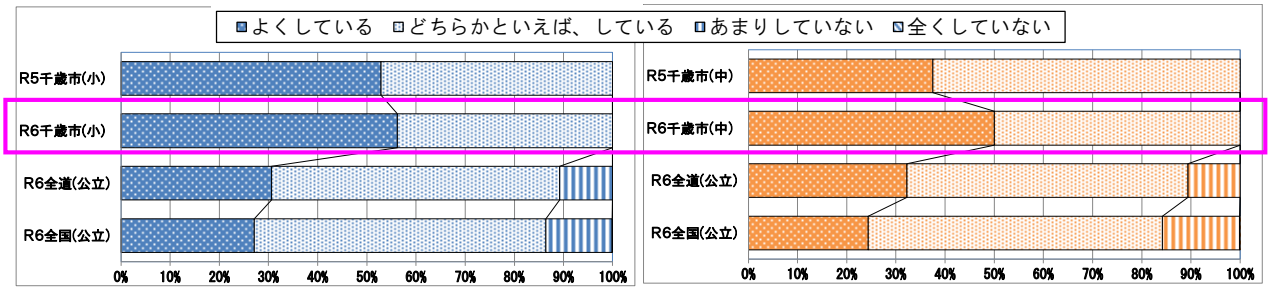
児童生徒の実態に応じた指導体制や方法の工夫の充実が求められる

算数・数学の「児童・生徒のつまずきを想定した指導」について、「よく行った」と回答した学校は、小学校は 68.8%で全国（38.5%）を 30.3 ポイント上回り、中学校は 62.5%で全国（42.3%）を 20.2 ポイント上回っている。諸調査の結果分析に基づいて、児童生徒のつまづきを想定して指導にあたることは、学習意欲の高揚や学習内容の着実な理解が期待できることから、引き続き、組織的な指導が求められる。その際には、千歳市が独自に配置した学習支援員や道教委の指導方法工夫改善加配教員を活用し、学校の実情に応じた体制や指導方法を工夫し、習熟度別少人数指導の充実を図る必要がある。

２　千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」に関して

①　教職員研修

質問番号 １８	個々の教員が自らの専門性を高めるため、校外の各教科等の教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加している（オンラインでの参加含む）

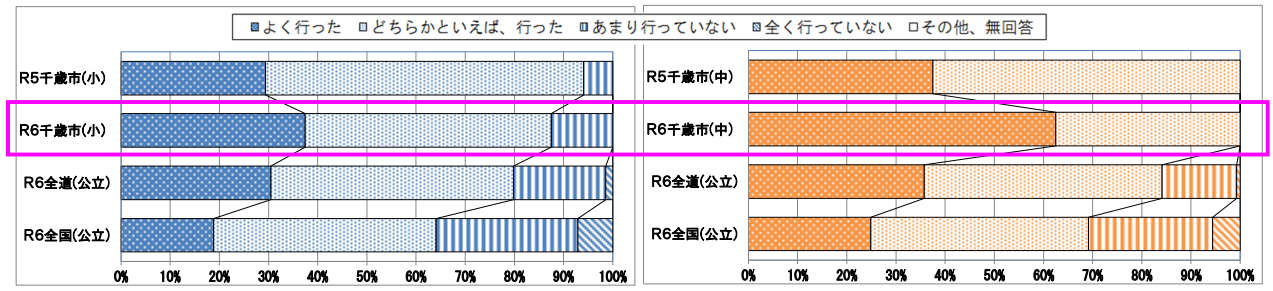


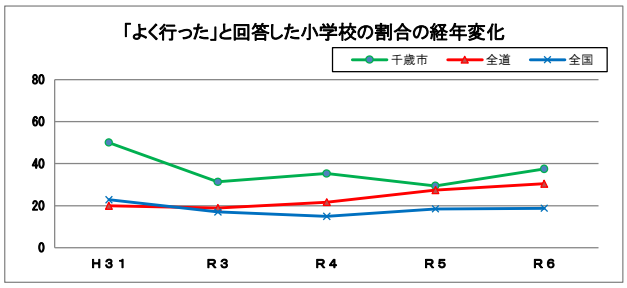
研究会の参加機会が増え、日々の授業改善が期待される

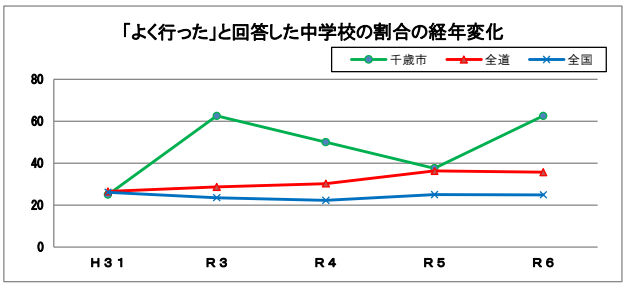
「よくしている」と回答した学校は小学校 56.3%、中学校 50.0%であり、小・中学校ともに全国（小 27.1%、中 24.3%）を上回った。昨年度と比較しても小学校で 3.4 ポイント、中学校で 12.5 ポイント上昇しており、コロナ禍により機会が減ったり、参加人数が制限されたりしていた研究会が戻りつつある。校外の専門教科等に関する研究会、千歳市教育委員会主催や石狩教育研修センター主催の研修会については、教科指導への理解を深め、他校の優れた実践を学ぶ機会となることから、今後も積極的かつ継続的に参加できる学校体制が求められる。個々の教員が自らの専門性を高めることは、日々の授業改善に大きく寄与することから、研修を通じた教員の資質能力の向上が期待される。

②　小中一貫・連携教育

質問番号 小68　中72	前年度までに、近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行いましたか。







いずれも小・中学校ともに全国を上回っているが、一層の充実が求められる

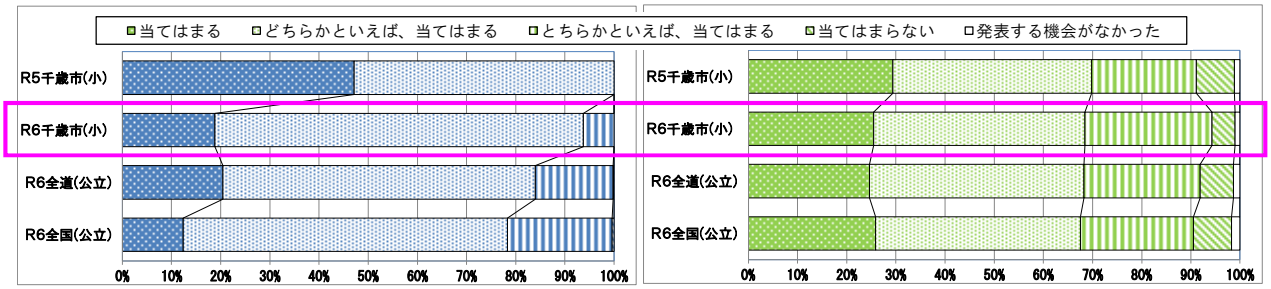
「近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行ったか」に対して、「よく行った」と回答した小学校は 37.5%、中学校は 62.5%であり、小・中学校ともに全国（小 18.8%、中 24.8%）を上回っている。昨年度と比べても上昇しており、コロナ禍による交流の制限を終え、中学校区の児童生徒の実態に応じた協議や交流が進められているものと考えられる。「探究型・対話型」授業やＩＣＴ活用にあり方などは、小・中学校の接続や実践の積み重ねが重要となることから、引き続き、連携の充実が求められる。

３　授業に対する教師と児童生徒の意識の違い（児童・生徒質問調査の回答と比較）

①　主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善―１

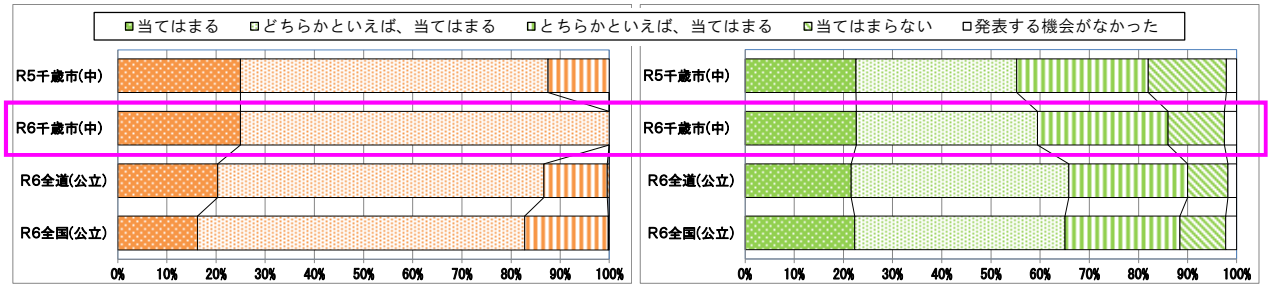
質問番号 ２６	調査対象の児童は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。

質問番号 ２９	５年生までに受けた授業で自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。　児童質問調査



質問番号 ２６	調査対象の生徒は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。

質問番号 ２９	１，２年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。　生徒質問調査

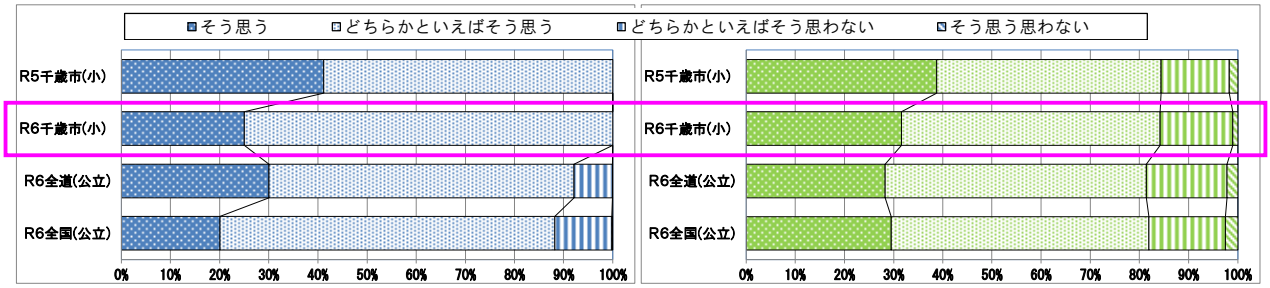


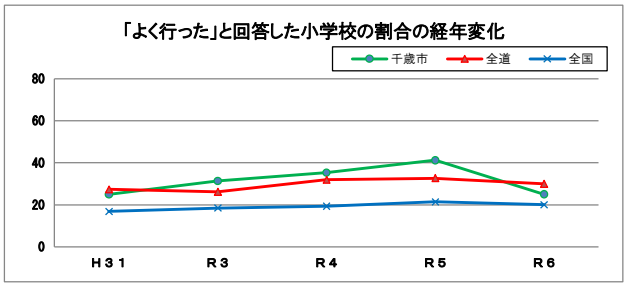
「調査対象の児童生徒は授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思うか」に対して「そう思う」と回答した学校は、小学校は 18.8%で全国（12.4%）を上回っている。中学校も「そう思う」と回答した学校は 25.0%で全国（16.2%）を上回っている。児童生徒質問調査の「これまでに受けた授業で自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表したか」という質問に対して「当てはまる」と回答したのは、小学生は 25.5%（全国 25.9%）、中学生は 22.5%（全国 22.2%）である。教師と、指導を受ける児童・生徒との意識の差は、小学校は 11 ポイント縮まって 6.7 ポイント、中学校は 0.1 ポイント広がって 2.5 ポイントである。

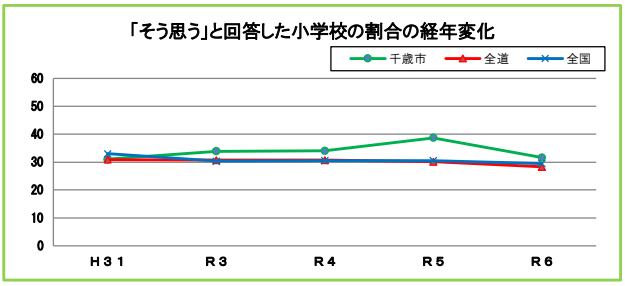
②　主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善―２

質問番号 ２５	調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。

質問番号 ３０	５年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。　児童質問調査

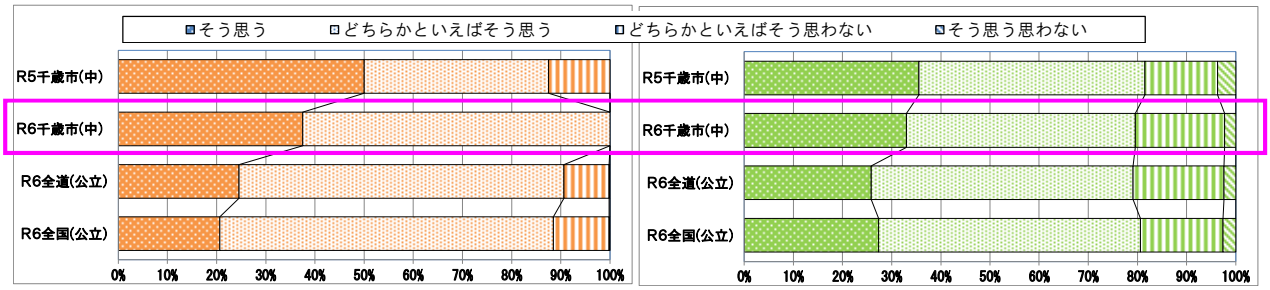


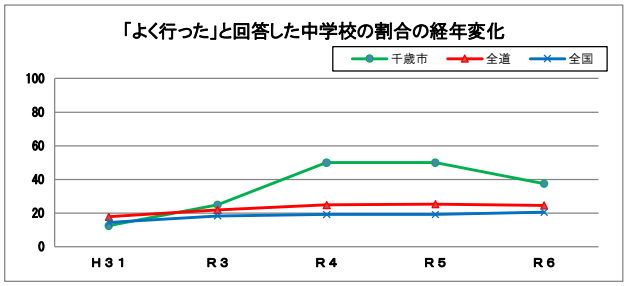


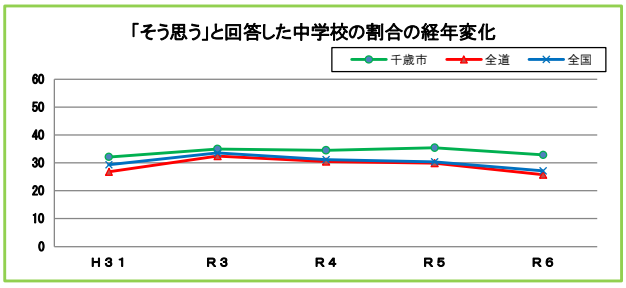


質問番号 ２５	調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。

質問番号 ３０	１，２年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。 生徒質問調査







授業に対する教師と児童・生徒の意識の差をさらなる授業改善に生かしていくことが望まれる

「調査対象学年の児童生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思うか」に対して小学校は 25.0%で全国（20.1%）を 4.9 ポイント上回り、中学校は 37.5%で全国（20.6%）を 16.9 ポイント上回った。児童生徒質問調査の「これまでに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思うか」に対して「当てはまる」と回答したのは、小学生は 31.6%で全国（29.5%）を 2.1 ポイント上回り、中学生は 32.9%で全国（27.2%）を 5.7 ポイント上回った。教師と、指導を受ける児童生徒との意識の差は、小学校は前回より 1.2 ポイント広がって 2.5 ポイント、中学校は 0.9 ポイント縮まって 14.6 ポイントである。

全ての児童生徒が興味・関心を生かした自主的、自発的な学習に取り組めるよう、児童生徒自らが学習課題を見出し、活動を選択する機会を設けるとともに、「書く」「話す」「発表する」などの発信を通して、考えの深化や新たな考えに気づく「探究型・対話型」学習を促すよう工夫・改善を図る必要がある。